



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.160
2017.1.1
謹賀新年

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— E.S.モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

● 第13回 ● モースの定量的選択と分類の曙光

モースにより大森貝塚から定量的選択された「**十字架形**」突起(第15図)は、椎塚貝塚では典型例を見出すことはできない。後代の山内清男が加曾利B式の標本を『日本先史土器図譜』や椎塚貝塚に求める立場は、**モースが加曾利B式と異なる標本を大森貝塚で定量的選択した学史に従う意義**もあり、極めて明瞭かつ適切な課題を創出した。

関東地方における**地域圏の複合状況を土器型式の重層構造**により再構築する議論は、植房式・浮島式・興津式等西村正衛の研究に顕著であるが、残念ながら加曾利B式は1980年の『大田区史』まで待たなければならぬ。ここで漸く西部関東方面には加曾利B式と誤認されてきた異質な系列が認識されるに至り、新たに「**大森1式**」(第15図4・5・7)及び「**大森2式**」(第15図6・8~12)と命名し、過誤を改訂する機会とした。学史的嚆矢としての第15図は新たな内部構造の核を象徴する標本となる。

同様にして「十字架形」突起以外にもモースの定量的選択に従い大森貝塚の指導的特徴を見るならば、「この土器に似た口縁部が沢山みいだされた。」とする「**ソロバン玉**

形」深鉢(第16図右)が「大森2式」の象徴的標本である。本例では突起とは異なる分類作法に具体的な関心が赴き、「この土器に似た口縁部」の「沢山」例を拠り所としてモースの分類を穿つならば、「この土器に似た口縁部」とは平縁で有頸の無文帯を有し、肩部に磨消弧線文などの類似の磨消縄紋を配する部位までに限定されており、**体部の文様帯を不問とする許容範囲で「ソロバン玉形」の形態・装飾を指している。**

前述した突起の分類作法でも実際には多様な類似の形態が大森貝塚には存在するにも拘わらず、「十字架形」突起を選定するモースの分類は、**特定部分に限定した属性を対象とし、特定部分の形態と装飾については一体構造として扱う狭義の類似で分類する生物学の個体群に匹敵する作法である。**厳密に分類したはずの「十字架形」突起であるが、更に**体部の文様帯まで分類視点を拡張するならば即座に文様構成の相違により「大森1式」と「大森2式」に区分されるように、改めて特定部分のみに限定する分類の曖昧な危険性が問われることになる。**

坪井正五郎による西ヶ原貝塚の悉皆分類

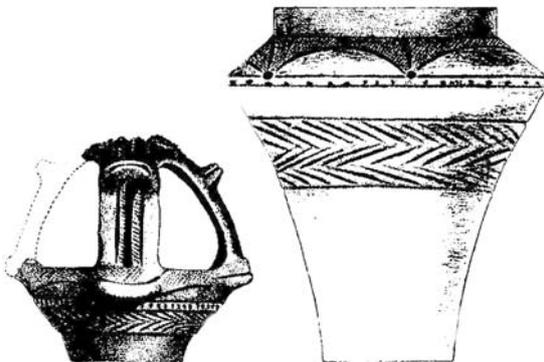
をモースの曖昧さを克服する方法として高く評価すべきが、加曾利B式研究の序の幕であることはすでに触れたが、「土器片研究の指導方針」としたように「**土器片**」の断片制約は大きく、**完形土器全体の文様帯を重視すると新たな質的分类に到達する。**

例えば第16図左の釣手土器は口縁部を磨消弧線文、体部を区画内綾杉文とする「磨消弧線文+区画内綾杉文」構成に従い、形態は「ソロバン玉形」と似ても似つかないものの、第16図の二者は**異なる器種系列が文様帯を共有する新たな相同関係の分類概念を創出することになる。**

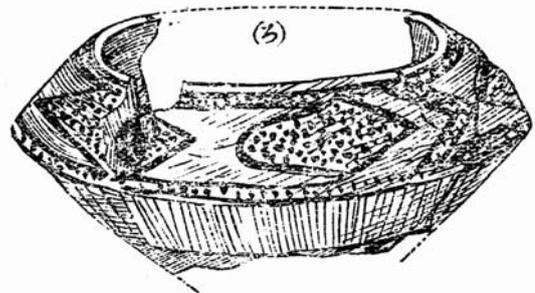
他方で大森貝塚との関係が指摘される椎塚貝塚の第17図は、形態は「ソロバン玉形」と共通するものの、文様帯が「大森2式」と異なり、加曾利B式の特徴である。

山内清男の「**文様帯系統論**」で確立し以後展開する思考法は、**大森貝塚の定量的選択が椎塚貝塚では定性的相異に変容する相互影響に動的な関係性を観る。**

畢竟、大森貝塚の「ソロバン玉形」深鉢と「十字架形」突起からは椎塚貝塚との直接的な関係は見えない。



▲第16図 大森貝塚の「ソロバン玉形」深鉢と略似た文様帯の釣手土器



▲第17図 椎塚貝塚の「ソロバン玉形」(無頸)鉢

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目次

■加曾利B式土器 モースの定量的選択と分類の曙光(第13回) 鈴木正博 …1
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第6回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第153回) 臺 由子 …3
■考古学者の書棚 「歴史哲学への招待 生命パラダイムから考える」 金子直行 …4

考古学の履歴書

ことのはじまりー「..それでは 何だ」(第6回) 間壁 忠彦・間壁 葎子

3. 固まってしまった瓦経(1)

岡山県倉敷市の市街地北郊には、太平記が記す福山合戦の古戦場とされる標高200mばかりの山があり、北の総社市との境界となっている。この山の南の中腹に浅原安養寺という古刹があって、南北朝の合戦で寺は焼失したと伝えられるが、今も国指定を含む藤原時代の仏たちがおおく残る寺として知られる。

この寺が考古学の世界に登場するのは、1937(昭和12)年の秋に寺の背後の丘陵から瓦経が纏まって発見されたことによる。寺僧らが偶然に地表へのぞいた瓦製品を発見、全点を掘り出し寺に持ちかえった。その内容は、表裏各十行に法華経八巻を書写した207枚、表裏十行だて1枚で完結する般若心経、塔婆型の法華経題箋8本、瓦経と同様な瓦板の表面に仏像を線刻した図像瓦5枚、それに瓦製宝塔1基が加わったものである。この瓦経塚資料の保存状況が他に例を見ない極めて良好なものであるとして、発見の翌年の12月に当時の奈良皇室博物館(現奈良国立博物館)は、園田敬男研究員を安養寺に派遣して資料調査を行い、その少し後に主な資料を2年間ほど借用展示したという。

出土の資料についての園田氏調査時の記録などは、梅原末治「備中安養寺の瓦経とその遺物」(吉備考古81・2合併号、1951年)に記されているが、それによると現在完存している法華経207枚のうち十数枚が不足し、図像瓦が1枚少ないことになっている。1956(昭和31)年、この資料が国指定の重要文化財に指定されたが、その時にも奈良皇室博物館園田氏調査時と同じ枚数のままで指定されていた。

その後、1979(昭和54)年になって、寺の参詣者受付のための事務所を建て直した時、同建物の天井裏から法華経の不足分全体と阿弥陀如来図像瓦1枚が再発見された。恐らく、出土のころ参拝者に見せるために受付に置かれていた瓦経が、天井裏に仮置きされたまま忘却されていたのであろう。これにより、瓦経塚資料のなかで、最も残存状況の良好な資料とされていたものが唯一の完存資料となった。また、瓦製宝塔は台・塔身・笠・相輪をそれぞれ別作りにして重ねたものであるが、相輪部分は、発見時以来笠の上部へ作られた柄穴に差し込んだ部分のみが残り、上に続く相輪の主要部分を欠失していた。その相輪の下半部を、当初の発見時から代わりしていた住職が、1972年に寺の裏から採集した。間壁葎子がこれを預かって東京国立博物館へ出品中の宝塔笠上の相輪柄内の残存部と直接に接着することを確かめた。共に幸運な出来事であったが、瓦経塚造営者の功德が800年の後にまでも御利益をもたらしたのかと思わず挿話であった。

瓦経が重文指定となった翌々1958年5月のこと、檀徒の人が寺の西南に近い丘陵尾根で、寺の整備のために礫石を採取中に壺のようなものを発見したというので調査に赴いた。出土していたのは瓦質の経筒であった。下に平石を敷き周囲も石で囲んだ中に横倒しになっており、石囲いの半ばは以前から失われていた。副産品として高さ17cmあまりの金銅製誕生仏のほかには鉄製刀子、白磁合子・青磁碗断片があり、平安末期の紙本経塚だったが、誕生仏は台座を欠失、天上を指した右手を

肩の部分で失い肩にその手を補修していたかと思わず小孔があり、白鳳～奈良期の作が傳世して副納されたかと思定されるものであった。

紙本経塚の所在が判明したため、それまで不明であった瓦経塚の地点も、新発見の紙本経塚に近接した地点だったので、周辺の地表面を観察したが、瓦経を掘り出して出来たはずの穴は埋まり、発見後、既に20年、それまでに研究者の探索がありながら明確に出来ていなかったものは、容易には明らかにはできなかった。ところが、紙本経塚から東に5mほど離れた同じ丘陵尾根上で、思いもかけなかった別の発見に遭遇することになった。

紙本経塚周辺を平板測量中、花崗岩が崩壊した丘陵の土のなかに、僅かではあるが、黒い粘土の塊のようなものが見える。古墳の粘土槨かと思うが、地形からみて古墳ではない。この時も「..それでは 何だ」だった。

その粘土塊は平面的な広がりがあるようで、上面を流失しているようであった。正体を知るために、粘土の状況を観察していると、厚さ2cmばりに剥離し、板状になることが判る。その板状の粘土断片の両面には、直線状の細い刻線による罫線のようなものがあり、罫線の間には漢字が刻まれているようだが、小さな断片となっていて判読できる状況ではない。しかし、罫線間の幅、板状品の厚さなど、文化財に指定された安養寺瓦経と類似していることは想像できる。いわば、瓦経が粘土状になって固まったものということか。粘土板状になった瓦経のことなど聞いたこともない。

経塚についても、その中では特異な形態の瓦経のことなどの知識に乏しかった私たちにとって、その場で調査を続けることは、遺跡の破壊に繋がるように思われた。しかし、地表に露出してすでに上部から流失を始めている状況の粘土塊状の瓦経を長く放置するのも、全体の損傷が危惧される。なるべく早い対応を要する。とりあえずは、粘土塊の上を土で覆い、調査の体制を考えることにした。

156号と158号で冒頭の番号が「3」とありましたが「2」の編集間違いです。お詫びいたします。 編集子

間壁忠彦 略歴

1932年 岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる
1951年 岡山県立操山高等学校卒業
1955年 岡山大学法文学部法学科卒業
1954~1973年 (財)倉敷考古館学芸員
1973~2006年 同上館長
1968~1998年 広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982~2005年 就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006~2015年 (財)倉敷考古館学術顧問

間壁葎子 略歴

1932年 岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年 岡山県立操山高等学校卒業
1955年 岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1955年 岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)
1956~2015年 (財)倉敷考古館学芸員
1979~1986年 中国女子短期大学非常勤講師(歴史学)
1985~2004年 神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
1995年 明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は岡田淳子先生です。

Uレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 153

ルーヴル美術館 ～フランス

臺 由子

私の研究テーマはフランスの博物館史だ。特に、ルーヴル美術館の誕生の話になると血沸き肉躍る。

フランスはパリにあるルーヴル宮は、12世紀、セーヌ川側の防衛のための要塞から始まる。石積みで径約15メートルの円筒形のドンジョン(主塔)が築かれ、この周囲を方形に城壁を巡らした建造物であった。

中世に要塞から城館へ改築され、その美しい姿は『ペリー公のいと豪華な時祷書』(シャンティイ・コンデ美術館所蔵)の十月の種まきの背景に描かれている。後世の改築の度、ルーヴル宮の建物は変化した。

地中に残されたドンジョンなどの遺構は、1991年に発掘され、地下のショッピングモールとルーヴル美術館で公開された。この薄暗い地下遺構も私は愛してやまない。

ルーヴル美術館初代館長ドミニク・ヴィヴァン・ドゥノン(1747-1825)は、多才な人物で、小説『明日はない(Point de lendemain)』を書いた。それは、「私は…伯爵夫人を狂おしいほど愛していた」と始まる、宮廷を舞台とする刹那的な恋愛ドラマだ。ルイ・マル監督の映画『恋人たち』(1958年)の原作でもある。小説と違って、映画の中では、金持の夫と華やかな愛人を押しつけて、夫人の心を射止めるのは、若い考古学者だ。物欲や奢多より真理を選んだともいえよう。

この『明日はない』は、特別な箱に入れられ、ルーヴル美術館の壁の中に隠されているという。ルーヴル美術館の多数ある都市伝説の一つだろうが、足を運ぶ度に壁を観察してしまう。

私がフランスの博物館史を研究テーマとしたのは、フランス語が少し読めたからだ。美術館となっていく過程のフランス革命期のデクレ(政令)や文書館に保存された文書を読み、17世紀から19世紀にかけてのフランス語辞典や蘭仏辞典などを用い、博物館関連用語の定義の調査をしている。

このような研究テーマからは、「私は、考古学徒だった」と言っても、信じてもらえないだろう。私は、社会人入試で明治大学の考古学専攻に入学した。現役の学生とは9歳の差があったが、職場から大学の夜間部の授業に出かける時はワクワクした。知らなかったことを教えてくれる先生方に感動した。

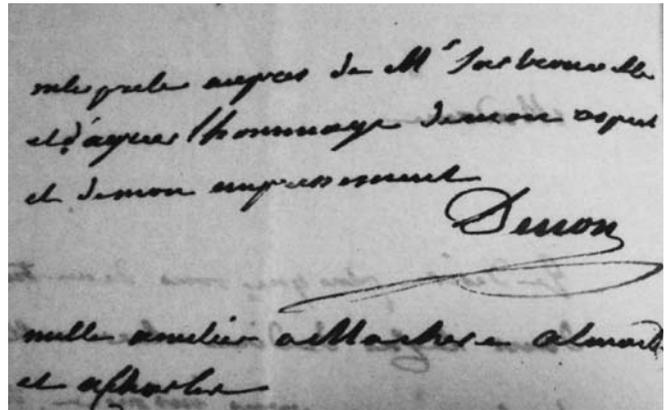
「動く博物館」って何? 「市民のための考古学」ってあり得るの? と、私をびっくりさせたのは、戸沢充則教授だ。(役職は当時。以下同じ)

古墳を勉強したかったのに貝塚に縁が深くなり悩んでいた私に、小林三郎教授は「どの時代や史料でも、自分の知りたいことしか出来ない」と、目から鱗のアドバイスをくれた。

大室古墳群の発掘調査を見学に行き、憧れの古墳研究者である大塚初重教授の発掘のライブ感に酔いしれた。

私の1~2歳年上だった修士課程・博士課程の院生たちも凄かった。

陸平貝塚の貝塚の範囲を特定するため、ピンポールを地面に突き刺した時に手に伝わる感覚を教えてくれたのは、小菅



▲ドミニク・ヴィヴァン・ドゥノンの手紙(部分)筆者蔵

将夫さん。石器の実測の指導を受け、「そんな風に見えるの?」って、石器と実測図を見比べて感動した。現在、岩宿博物館の館長とは、はまり役だと思う。

貝塚の発掘実習の時、実施本部テントの中で戸沢教授を前にし、凜とした声で発掘の計画や貝塚保存の理想を熱く語っている女性がいた。戸沢教授は宝物を受取るかのように話を聞いていた。彼女は『陸平通信』という手書きのニュースレターで発掘の進捗や保存の必要性を広報した。私は、羨望のまなざしで見つめた。親しみ込めて「モヘさん」と愛称で呼ばれた齋藤幸恵さん(現在、大竹)は、黒耀石体験ミュージアムの展示や体験プログラムを作り、長和町で埋文の仕事をしている。私は、この先輩に甘え、発掘やイベントに参加している。

陸平貝塚周辺にある低湿地遺跡の発掘の遺物整理にも参加した。「文化とは何か」とか「プラントオパールによる古環境復元」なんていう勉強会から始めたのは、現在、北海道大学教授として活躍する小杉康さん。合宿しながらの整理作業であったが、彼は手料理を振舞い、差し入れに舌鼓を打ち、時にはギャグも言った。「ペンは剣よりも強し」と、学問の神髄を語った姿勢に私は影響を受けた。

扱う史料は違えども、当時の経験は私の基礎となり、歴史研究を続けていると言える。考えたことを少しでも書残すように試みる。それは、過去からのメッセージを読み解き、それを来世に伝えることだと思う。読者が幸せを感じられるラブレターのようにあって欲しいと努力する。

私は、ドゥノンのサインを同定するためではあるが、直筆の手紙を持っている。それは、逢えなかった女性へのお詫びのラブレターらしい。時折、それを書棚の奥から出して、当時のフランスを想像する。それがフランス博物館史を研究する原動力だ。史料を探し、分析し、歴史を再現し、論文を書きたくなくなる。

私にとって歴史研究とは、過去の事象や人物に対してラブレターを書くことである。それは、読者に向けたラブレターでもある。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは浦志真孝さんです。

考古学者の書棚

「歴史哲学への招待 生命パラダイムから考える」

小林道憲著／ミネルヴァ書房(2013)

金子 直行

本稿の掲載予定は、平成29年1月1日号であると聞く。突然の依頼で、何も考えずに承諾したものの、お目出度い号に掲載されるのは少々気の引ける思いがする。かように筆者の運命は、ある種予想もしない出来事に左右されることの繰り返しである。しかし、今まではその出来事の偶然性を意識せず、何らかの因果関係を探し出し、さも自分との関係性があるかの如く錯覚し、自身を納得させてきたように思えてならない。

筆者は今年の3月にいわゆる一回目の卒業を迎える。今までの来し方を回想すると、人生の節目で様々な出来事に遭遇し、もがきながらも現在の状況へと辿り着いた感が強い。これが、予想した、もしくは望んでいた姿であろうか。否、まさしく偶然の出来事に対して楽天的に環境適応した結果の姿に過ぎないことは、言うまでもない。

個人ならばこのような達観した人生観(歴史観)を持つことも許されるであろうが、考古学者が標榜するところの歴史学では如何であろうか。筆者を含め大方の方々は、学習または教育されてきたある種の法則性の存在を臆ながらも感じ取っているのではなかろうか。「歴史は繰り返す」などといった金言に触れ、歴史認識に対する自己判断を曖昧にしてきたことは否められない事実ではなかろうか。

そんな思いに対して、明快に答えてくれた本がここに紹介する「歴史哲学への招待」である。著者の小林道憲氏は複雑系の哲学者であり、自然哲学や宗教哲学、文明理論や存在論、認識論などを展開し、生命論的な世界観の構築を標榜してきた人物である。

本書は、第1章-変動する歴史、第2章-歴史と偶然、第3章-進化する歴史、第4章-歴史の認識、第5章-歴史の理解と記述、第6章-歴史の創造、で構成されている。

本書の冒頭、2011年の東日本大震災と大津波の被害、合わせて原発事故による大被害について触れ、偶然に起こる大自然の猛威を前にして、今後この国がどのような道を歩めばよいのか自問し、歴史のターニングポイントをこの偶然性に求めるところから始まる。そして、国内外を問わず、大きな歴史の転換期における歴史事象をふんだんに紹介しながら、歴史は偶然に翻弄されながら大きく変動してきたことを説く。

第1章では、第一次世界大戦がオーストリアの皇太子とその妃の乗る車が、バルカン戦争の勝利記念日式典からの帰路を変更したことで運転手が道を間違えて立ち往生し、その瞬間にセルビア人の学生に狙撃されて殺害されたことに端を発することに触れ、このような偶然の小さなきっかけであるわずかな変動が増幅されて限界値を超えて激変となり、秩序の崩壊や形成が起こることを説明する。また、日本の明治維新や中国革命においては、それに至るまでに起こった一連の小さな改革の動きがゆらぎとして存在し、ゆらぎが増幅して新しい社会秩序を創り出していることを指摘する。

このような多数の要素の相互作用から秩序の生成と崩壊が繰り返される歴史の変遷については、複雑系のカオス理

論から俯瞰し、偶然に起こる一つの事件の初期条件に対する敏感な依存性に依拠する創発現象としてのカオスの遍歴と、ゆらぎの変動に対して敏感に反応しながら柔軟に自己自身を作り替え環境に適応して新しい社会秩序を創り出す自己組織性の両者が、大きな原動力となっていることを説いている。

また、第5章では、歴史を理解するまたは記述する者は、自身が歴史の中にあつて歴史を観測する歴史内観測者としての自覚を持つことの必要性を説く。歴史は歴史を記述する人が歴史内観測者として歴史に参画し、認識し、記述し、評価することによって映し出すことができ、また歪められたり、改変されたりもする。歴史内観測者は、認識という働きを通して歴史の自己形成に参加しており、歴史は自己自身の中に歴史認識者を含むことで絶え間なく自己自身を形成して行くという関係にある。従って、歴史を外部から歴史外観測者として、客観的に観測することはできず、歴史における客観性や客観的法則性は成り立ち得ないことを解説する。

第6章では、歴史内観測者は歴史内行為者としての歴史的経験と履歴を残しながら歴史を動かしている。そこには不可逆性と不確定性原理が成り立ち、形成される歴史の中に形成する歴史行為者がいる歴史の自己形成の動きを、歴史の外から決定論的に記述することはできないことを説いている。

本書は、二十世紀終末に日本においても注目されてきた自然科学における新しい傾向、即ち自己組織化理論やカオス理論、ゆらぎ理論、さらにそれらの総合としての複雑系理論などのいわゆるシステム論的見方から、自然自体について履歴を持つものとして認識する新しい傾向を、歴史学に適応させようとする実践的な哲学書として評価される。

今日、考古学は歴史学の中での位置付けを志向しているものと思われるが、考古学実践者が歴史内観測者であることを自覚した上で、歴史変換の大きな要因を偶然性に認め、考古学における非決定性、予測不可能性、一回性、不可逆性を意識し、遺物、遺構、遺跡、時代解釈実践者としての立場からの考古学を構築する必要があるものと考えられる。そこには、歴史を貫く法則はなく決定論もない、ということになる。

本書は非常に読みやすく又分かり易く書かれているため、これが正しい編年とか型式の客観的な実体化を唱えるような論攷などと併読されることを勧めたい。

アルカ通信 No.160

発行日	2017年1月1日
企画	角張淳一(故人)
発行	考古学研究所(株)アルカ
	〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
	TEL 0267-25-0299
	aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp